

日本語諸方言と韓国語の過去表現のムード的用法

高田 祥司 (秀明大学)
shoji.takata@nifty.com

1. はじめに

日本語東北方言では、過去表現として「～た」の他に「～タッタ」や「～ケ」が用いられる。標準語については、「～た」が〈過去〉〈完了〉といった時間的意味以外に、種々のムードの意味を表す現象が「ムードの『た』」として広く研究されてきたが、東北方言の各形式も同種の用法を持つ。高田(2021)では、特に岩手県遠野方言について、次のような現象を取り上げて論じた。

(1) コノ俳優、弟、{イダ/イダッタ/イルッケ} ¹。

- {<a> そのことを以前聞いていて思い出した場合—〈想起〉…三形式とも使用可
- { そのことを今まで知らず初めて聞いた場合—〈発見〉…「～た」のみ使用可

遠野方言では、「～ケ」は「～タッタ」と同様、「～た」が持つムード的用法の一部しか持たないが、静岡市方言では、「～ケ」が<a>,の両方に用いられる。また、韓国語でも、過去表現として-ess-の他に-essess-や-teが用いられ、基本的用法では、遠野方言の三形式とそれぞれ酷似しているが、-essess-が<a>,の両方に用いられるのに対して、-te-はどちらにも用いられない。本発表では、遠野方言と静岡市方言、韓国語の過去表現を対照し、次のようなことを考察する。

- (i) 遠野方言の三形式に見られるムード的用法の違い、それと基本的用法の関係 (2 節)。
- (ii) 静岡市方言の「～ケ」における用法の広がり、そこから分かる意味上の特徴 (3 節)。
- (iii) 韓国語と遠野方言の三形式のムード的用法における異同とそれが生じる理由 (4 節)。

2. 遠野方言の過去表現の用法²

2.1. 三つのムード的用法

高田(2021)では、過去表現のムード的用法として、①〈発見〉、②〈想起〉、③〈認識更新〉の三つを取り上げた。これらは、標準語では「～た」が担い、用語の違いはあれど、金水(2001)、定延(2004)で扱われているものにほぼ相当する。用法の説明、及び先行研究の用語・例文(文脈の補足や下線の追加等、若干変更した)を以下に示す。本発表でも、これらの用法を対象とする。

① 〈発見〉：発話時以前には全く認識していなかった事態を、発話時に認識。

※先行研究の用語…発見 (金水 2001、定延 2004)

(2) [探していた本をカバンの中に発見して] あ、あった。(定延 2004: 15)

(3) おや、こんな夜遅くに汁粉屋が開いてたよ。(金水 2001: 62)

② 〈想起〉：発話時以前に認識したが不確かになった事態を、発話時に再認識。

※先行研究の用語…回想 (金水 2001)、思い出し (定延 2004)

(4) 確かあなたは、関西の出身でしたね。(金水 2001: 55)

(5) [思い出しながら] 彼の電話番号はこの番号だったかなあ。(定延 2004: 35)

③ 〈認識更新〉：発話時以前に仮に認識していた事態を、発話時に正確に認識。

※先行研究の用語…関連づけ (金水 2001)、知識修正 (定延 2004)

(6) [ドリルの答え合わせをして] おや、答えは 3番だったか。(金水 2001: 55)

(7) [クイズ番組で司会者が解答者に] 正解は C でした。(定延 2004: 41)

これらは全て、事態が発話時にも成立しており、認識がいつ行われるかによって区別される。

比重	認識在時の	〈発見〉	現在の認識時のみが存在。
	認識去時の	〈認識更新〉	現在の主たる認識時の他に、過去の副次的な認識時が存在。
		〈想起〉	過去の主たる認識時の他に、現在の副次的な認識時が存在。

¹ 方言文は理解の便を考慮して、漢字片仮名混じりで表記。遠野方言の文を読む際、次の点に注意：(a) 母音間の/t/k/→[d][g]の有声化(母音間の/d/[g]/t/[k]/d/[g])になるが、区別せず)、(b) [ai]→[e(:)]の融合、(c) 助詞「は・が」「を」の不使用。

² 本節の遠野方言の記述は、高田(2021)の要点を以下の議論に必要な範囲でまとめたものである。例文も同論文に依る。

2.2. 「～タ」と「～タッタ」の違い

東北方言の一部では、過去形として「～タ」の他に「～タッタ」が用いられる³。遠野方言では、両形式がムード的用法において、次のような違いを見せる。

- (8) a. コンナドゴ(所) サ、ツバメノ巢、{アッタ/*アッタッタ}！〈発見〉
b. 確カ、アソゴノ軒先サ、ツバメノ巢、{アッタ/アッタッタ}。〈想起〉
c. [友達のことを信じていなかったが、実際にそうだと分かって＝文脈A]
アイヅノ言ウ通り、ツバメノ巢、{アッタ/?アッタッタ}。〈認識更新〉

「～タ」が三つのムード的用法を持つのに対し、「～タッタ」は、〈想起〉の場合は用いられるが、〈発見〉の場合は用いられない。また、〈認識更新〉の場合は不自然になる。類例を挙げる。

- (9) a. 三浦、中国語、{話セダ/*話セダッタ}ノ！ 知らネガッタ。〈発見〉
b. 三浦、中国語、{話セダ/話セダッタ}ガナ。前ニ話シテラッタ気スルガ。〈想起〉
c. [文脈A] 三浦、ホンドニ中国語、{話セダ/?話セダッタ}。〈認識更新〉

なぜ「～タッタ」のムード的用法が「～タ」に比べて制限されているかは、両形式のアスペクト・テンスの用法を見ることで理解できる。これらは、運動動詞では完成相過去の形式となる。

- (10) コノ間ノ祭りノ日、浴衣、{着タ/着タッタ}。ソレデ、盆踊リ、{踊ッタ/踊ッタッタ}。

(11) 浴衣、{着タ/#着タッタ}ノ。カワイーナ。ヨグ似合ッテラ。 #：文脈的に不適切
「～タ」が〈過去〉の〈完成性〉[(10)]に加えて〈現在パーフェクト〉[(11)]、即ち現在と関係付けられた過去を表すのに対し、「～タッタ」はそれを表さない。ここから、「～タッタ」は〈過去〉の〈完成性〉に特化した形式で、「**現在との断絶性**」を持つと言える。両形式は、このような事態の捉え方を認識についても行うことで、ムード的意味を表していると考えられる。〈発見〉は現在の認識時のみがあり、〈認識更新〉はそれが主たる認識時であるが、現在の認識時は、厳密には発話時直前の認識時であるため、これらは現在と関係付けられた過去の認識を表すと言える。よって、〈現在パーフェクト〉を表す「～タ」はこれらを表す。対して、過去の認識時を主とする〈想起〉は、現在の認識時が副次的に存在するものの、基本的に現在と切り離された過去の認識を表すと言える。よって、〈現在パーフェクト〉を表さない「～タッタ」もこれを表す。

2.3. 「～タ」と「～ケ」の違い

東北方言では、いわゆる「回想」の「ケ」が標準語より広い用法を持っている。遠野方言では、「～ケ」⁴がムード的用法において、「～タ」と次のような違いを見せる^{5,6}。

- (12) a. 山口、歌、{ウメガッタ/*ウメガッケ}ノ！〈発見〉
b. 山口、確カ歌、{ウメガッタ/ウメガッケ}。〈想起〉
c. [文脈A] アイヅノ言ウ通り、山口、歌、{ウメガッタ/?ウメガッケ}。〈認識更新〉

先の「～タッタ」と同様、「～ケ」は、「～タ」が持つ三用法のうち、〈想起〉の場合は用いられるが、〈発見〉の場合は用いられない。また、〈認識更新〉の場合は不自然になる。類例を挙げる。

- (13) a. 早希ノ結婚相手、{医者ダッタ/*医者ダッケ}ノ！〈発見〉
b. ソ一言エバ、早希ノ結婚相手、{医者ダッタ/医者ダッケ}。〈想起〉
c. [文脈A] 早希ノ結婚相手、ホンドニ {医者ダッタ/?医者ダッケ}。〈認識更新〉

「～ケ」のムード的用法については、その基本的な用法を見ることで理解できる。

- (14) ワラス(子供)ノ頃、毎週、ソノ番組、見ダッケ(ナー)。

- (15) 昨日ノ対局、羽生サン、逆転デ勝ッタクケ(ヨ)。

³ 『方言文法全国地図』190,196 図「いた」、197 図「行った」では、青森県東部・岩手県(旧南部藩領)、秋田県から、宮城県、山形県内陸部を経て、福島県、さらに北関東等に「～タッタ」が分布。遠野方言では動詞のみがこの形をとる。

⁴ 述語の無標形に「ケ」が付いた形を「～ケ」とし、助動詞「ケ」と区別。遠野方言ではイ形容詞の場合、連用形接続。

⁵ 「～ケ」は動詞述語以外にも用いられるので、形容詞・名詞述語の例文を挙げるが、2.2 節で見た存在動詞・可能動詞の例文のような状況でも、「アルッケ」「話セルッケ」が「アッタッタ」「話セダッタ」と同様の振る舞いを見せる。

⁶ 「ウメガタツケ」「医者ダツタツケ」という形式もある。遠野方言の「～タツケ」のムード的用法は「～ケ」と同様。

東北方言でも、「ケ」は標準語と同様、記憶を検索しながらの独り言的な発話に用いられるが [(14)]、記憶の検索が完了した事態を伝達する発話にも用いられる [(15)]。独り言的な文の「ケ」は「思い出し」⁷を表すが、伝達文の「ケ」の意味は次のように考えられる。記憶の検索が完了したということは、事態が確かに記憶中にあったということになる。ここから、「ケ」は伝達文では「ある事態を発話時以前に認識したこと」(以下、「過去の認識」)を表す。ここで言う「認識」は、五官を通じた事態の直接知覚(主に目撃)というエビデンシャルな意味である。これは主体の人称制限(基本的に一人称不可)⁸ [(16)] や歴史的事実に用いられない点 [(17)] に表れている。

(16) [先生に] { *俺 / 浩 }、グラント 10 周、走ッタツケ (ヨ)。

(17) *竹中半兵衛、秀吉ノ軍師サ、ナッタツケ (ヨ)。

このことから、「～ケ」のムード的用法が説明される。(想起) が過去の認識時を主とする一方、(認識更新) は現在の認識時を主とし、(発見) は現在の認識時のみがある。そのため、「過去の認識」を表す「～ケ」は、(想起) は表すが、(認識更新) (発見) は表さないのだと考えられる。

2.4. 「～タッタ」と「～ケ」の違い

以上のように、「～タッタ」と「～ケ」は、それぞれ「現在との断絶性」「過去の認識」を表すことから、共に過去の認識時の比重が大きい場合にのみ用いられるが、両者には異なる点もある。

(18) [何となく思っていたことを確認したところ、実際にそうだと分かって=文脈 B]

思ッタ通り、ツバメノ巣、{アッタ / アッタッタ}。

(19) [文脈 B] 三浦、ヤッパス (やっぱり) 中国語、{話セダ / 話セダッタ}。

これらは、発話時以前に仮の認識が行われている点で〈認識更新〉の場合だと言えるが、前掲の〈認識更新〉の例文(8c),(9c)では不自然であった「～タッタ」が用いられている。前掲の場合、仮の認識が行われた時点で、事態の成立に疑いが持たれていたのに対し、これらの場合は、仮の認識が行われた時点で、漠然とはあるが、事態が成立すると考えられている。ここで、前者を〈認識更新 A〉、後者を〈認識更新 B〉と呼ぶことにすると、仮の認識が誤っていた〈認識更新 A〉より正しかった〈認識更新 B〉の方が相対的に過去の認識時の比重が大きいと見られる。「～タッタ」は、〈認識更新 A〉の場合には不自然になるが、〈認識更新 B〉の場合には問題なく用いられる。

一方、「～ケ」は〈認識更新〉の場合には、相対的な認識時の比重に関わらず、用いられない。

(20) [文脈 B] 思ッタ通り、山口、歌、{ウメガッタ / ?ウメガツケ}。

(21) [文脈 B] 早希ノ結婚相手、ヤッパス {医者ダッタ / ?医者ダツケ}。

前掲の〈認識更新 A〉の例文(12c),(13c)と同様、これらの〈認識更新 B〉の例文でも、「～ケ」は不自然になる。これは、「～ケ」が「過去の認識」を表すことによると考えられる。「～タッタ」は事態成立時が過去であることを表しつつ、認識時が過去であることも表すが、「～ケ」は認識時が過去であることを表すところに本質的機能がある。そのため、相対的に過去の認識時の比重が大きいとは言え、やはり現在の認識時を主とする(認識更新 B)の場合に用いられないのだろう。

このような「～タッタ」「～ケ」の用法を、「～タ」と合わせて整理すると、下表ようになる。三つのムード的用法が認識時のあり方によって区別されることは、過去形が「～た」のみである標準語では直ちに見えてこないが、三形式ある遠野方言では形態的な面からはっきり示される。

PT □ ST	<	=	=		
PT' □ ST	=	<			
形式	ムード的用法	〈想起〉	〈認識更新 B〉	〈認識更新 A〉	〈発見〉
～タ	○	○	○	○	
～タッタ	○	○	△	×	
～ケ	○	△	△	×	

※ [PT: 主たる認識時] [PT': 副次的な認識時] [ST: 発話時] [<: 前者が後者に先行] [=: 前者と後者が同時]

⁷ 事態が発話時に成立している場合に過去表現が表す派生的意味の〈想起〉と異なり、これは元来のムードの意味である。

⁸ 「徹夜シタガラ、眠ガツケ」のように、一人称主体でも知覚可能な内的状態の場合には用いられる。韓国語の・te・も同様。

3. 静岡市方言との対照⁹

3.1. 静岡市方言の「～ケ」のムード的用法

静岡市方言でも、「ケ」が標準語より広い用法を持っており、独り言的な文で「思い出し」を表す場合 [(22)] に加えて、伝達文で「過去の認識」を表す場合 [(23)] にも用いられる。

(22) 昔、浅草ニ行ッタ時、人力車、乗ッタツケ (ナー)。

(23) 太郎ワ、プラモデル、作ッテタツケ (ヨ)。

ここから、静岡市方言の「ケ」も事態の認識に関わるムード的用法を持つが、遠野方言とは大きな違いがある。まず、形容詞述語の例を挙げる (前節の遠野方言の例文(12a)～(12c),(20)に対応)。

(24) a. 山ロワ歌ガ {ウマカッタ/ウマイツケ¹⁰} ! <発見>

b. 山ロワ、確カ歌ガ {ウマカッタ/ウマイツケ}。<想起>

c. アイツノ言ウ通り、山ロワ歌ガ {ウマカッタ/ウマイツケ}。<認識更新 A>

d. 思ッタ通り、山ロワ歌ガ {ウマカッタ/ウマイツケ}。<認識更新 B>

全ての用法で「～ケ」が用いられることが目を引く。遠野方言では、「～ケ」は<想起>の場合のみ用いられ、<発見>の場合は使用できず、<認識更新>の場合はA,Bともに不自然であった。対して、静岡市方言では、「～ケ」が<想起>だけでなく<発見>や<認識更新>の場合も問題なく用いられる¹¹。名詞述語の類例を挙げる (前節の遠野方言の例文(13a)～(13c),(21)に対応)。

(25) a. 早希ノ結婚相手ワ {医者ダッタ/医者ダツケ} ! <発見>

b. ソ一言エバ、早希ノ結婚相手ワ {医者ダッタ/医者ダツケ}。<想起>

c. 早希ノ結婚相手ワ、本当ニ {医者ダッタ/医者ダツケ}。<認識更新 A>

d. 早希ノ結婚相手ワ、ヤッパリ {医者ダッタ/医者ダツケ}。<認識更新 B>

以上から、次のことが言える。2節で確認したように、<想起>は過去の認識時、<認識更新>は現在の認識時を主とし、<発見>は現在の認識時のみがある。遠野方言の「～ケ」は「ある事態を発話時以前に認識したこと」を表すため、<想起>の用法しか持たないが、静岡市方言の「～ケ」は<認識更新> <発見>の用法も持つので、「ある事態を発話時 (厳密には発話直前) に認識したこと」(以下、「現在の認識」)も含めて、広く「ある事態を認識したこと」を表すと考えられる。

3.2. 「～ケ」の過去形としての使用

静岡市方言では、「～ケ」がテンス的用法の範囲も広げている (cf. 山口 1968)。非動詞的述語のテンスでは、事態成立時の他に認識時に関わるため、<過去>に大別して二種類の場合がある。静岡市方言の「～ケ」は両方に使用可能で、「～タ」と共に非動詞的述語の過去形として用いられる。

(I) 事態成立時 (ET) が過去 (同時に認識時 (PT) も過去)。

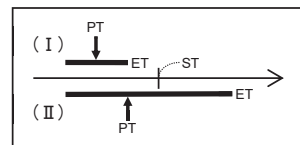
(26) 森ワ子供ノ頃、足ガ {速カッタ/速イツケ}。

(27) 山田ワ高校生ノ頃、学級委員 {ダッタ/ダツケ}。

(II) 事態成立時が発話時 (ST) を含み、認識時のみが過去。

(28) コノ前競争シタケド、森ワ足ガ {速カッタ/速イツケ}。

(29) コノ間話シタケド、山田ワ学級委員 {ダッタ/ダツケ}。



{(I) $ET < ST$ (かつ $PT < ST$)
(II) $ET \supset ST$ かつ $PT < ST$ }

ET \supset ST である(II)の場合は、非過去形「速イ」と交替できる。遠野方言では、「速ガツケ」は「速ガッタ」と異なり、(II)の場合は用いられるが、ET $<$ ST である(I)の場合は使用できない (cf. 高田 2004)。対して、静岡市方言では、「～ケ」が(I)の場合にも用いられるが、これは ET $<$ ST であることを表さず、あくまで PT $<$ ST であることに注目していると考えられる。ここから、遠野方言では、ET \supset ST である場合にのみ、認識時に注目した過去表示が行えるが、静岡市方言では、ET $<$ ST の場合であろうと、ET \supset ST の場合であろうと、それが可能だと言える。

⁹ 静岡市方言の記述は、2024年8月の臨地面接調査とその前後の通信調査に基づく。インフォーマントは70代女性、40代男性、10代女性各1名。「～タツケ」の用法等、話者による違いもあったが、今回扱う現象に関する違いはなし。

¹⁰ 遠野方言では、イ形容詞の場合、「ケ」が「ウメガツケ」のように連用形に付くが、静岡市方言では終止形に付く。

¹¹ 山口(1968)も静岡県中部方言の「コンナトコニアツケ」という<発見>の例を挙げる。小林(1999)は種子島方言について、同様の例の他に「ワーモ ワラーワ スッケラー (お前も笑うんだなあ)」という<認識更新>に類する例を挙げる。

ここまで、静岡市方言の「～ケ」について、二つの点で認識を表す用法が広いことを見てきた¹²。

- | |
|--|
| ①認識時が過去と現在のどちらかに関わらず、「ある事態を認識したこと」を表し得る。 |
| ②事態成立時が過去か発話時を含むかに関わらず、認識時が過去であることを表し得る。 |

山形市方言や米沢方言では、静岡市方言と同様、「～ケ」が非動詞的述語において(I) ET < ST の状況でも使用できるが、ムード的用法に制限がある。遠野方言と同様、〈想起〉は表すが、〈認識更新〉(発見)は表さない。これらの方言では、非動詞的述語の過去形として専ら「～ケ」が用いられ、「～タ」は通常使用されないが、〈認識更新〉(発見)の場合に限って用いられる(cf. 高田 2004)。つまり、山形市方言や米沢方言の「～ケ」は、②の特徴は持つが、①の特徴は持たない。このような方言の存在から、①と②は関連する特徴ではないと考えられるが、静岡市方言は、「～ケ」が二方向に認識を表す用法を広げている点で、興味深い事例を提供してくれている。

3.3. 「～ケリ>～ケ」の意味・用法の変遷

「ケ」の原形である古代語の過去の助動詞「ケリ」は「詠嘆」も表した。これは、ただの詠嘆ではなく、今まで気づいていなかったことに気づいた驚きを伴うものである(気づきの「けり」)。

(30) 山川に 風のかけたる しがらみは 流れもあへぬ もみぢなりけり (古今集 秋下 303)
この「～ケリ」の詠嘆、気づきの意味は「～タ」の〈発見〉の意味に類似している(上例の訳は「～紅葉であったことよ」)。「～ケリ」が〈発見〉のような意味を表したのは、「来アリ」に由来するためだろう。事態が過去から来て目の前にあるというところから、本来は「現在の認識」を表した。そこを起点として、「過去の認識」の方へ意味を広げ、〈認識更新〉や〈想起〉の用法を持つに至った。それにより、「～ケリ」は現在か過去かに関わらず「認識の成立」を表したと見られる¹³。この「～ケリ」の機能は、一般言語学で言う「ミラティブ」(話し手にとって意外な新情報を伝える、DeLancey 1997 等)に相当する。静岡市方言の「～ケ」も同様に、現在か過去かに関わらず「認識の成立」を表し、〈発見〉(認識更新)〈想起〉の全ての用法を持つ点で、「～ケリ」に近い古い段階の用法を保持していると言える。遠野方言の「～ケ」は、この段階からさらに変化を進めて、「現在の認識」を切り捨て、「過去の認識」のみを表すようになったのだろう。

この「～ケリ>～ケ」の変化は、「～タリ>～タ」と並行的に捉えられる。「～タリ」は「～テアリ」に由来し、事態が起こり結果が目の前にあるというところから、本来は「現在の状態」を表した(存続の「たり」)。そこを起点として、現在の状態をもたらし先立つ運動に重点を移すことで、〈現在〉の〈結果〉→〈現在パーフェクト〉→〈過去〉の〈完成性〉と、その意味を広げたが、現代語の「～タ」は、主節末では「現在の状態」を表さない。この事態の側面における変化と同様、「～ケリ>～ケ」は認識の側面における重点を現在から過去へ移したと考えられる。

4. 韓国語との対照¹⁴

4.1. 韓国語の過去表現のムード的用法

韓国語にも、「～タ」に相当する-ess-だけでなく、-essess-、-te-という過去表現が存在する。-ess-は〈過去〉の〈完成性〉[(31)]と〈現在パーフェクト〉[(32)]を表すが、-essess-は〈現在パーフェクト〉を表さない。これは、遠野方言の「～タ」と「～タッタ」の違いと同様である。

- (31) Ilcen=ey nwuna=hantheyse cim=i wa-ss-ta/wa-ssess-ta.¹⁵

この間、お姉ちゃんから 荷物が 来タ/来タッタ。

- (32) Nwuna=hantheyse cim=i wa-ss-ta/#wa-ssess-ta. Pwa, an=ey-tu-n_ke=n sakwa=ya.

お姉ちゃんから 荷物が 来タ/#来タッタ。見て、中身は リンゴだ。

¹² さらに、「アリガト〜ケ」のような表現も可能である。これは過去の事態に対する発話時の認識(評価)を表す。

¹³ 小林(1999)は種子島方言の「ケル」の機能を、話し手の発話時における認識の成立の表示とし、「ケリ」に近いと見る。

¹⁴ 韓国語の例文の文法性判断は鄭恩朱氏にお願いした。ただし、4.2 節の(37),(38),(40)は許(2008)の例文(表記は改変)。

¹⁵ ハングルの転写は Yale 式ローマ字で行う。以下、遠野方言の例文は、韓国語の日本語訳を兼ねさせるために、述部のみを片仮名の方言形で(有声化は捨象)、他の部分は標準語で示し、韓国語の例文に対応する形で分ち書きする。韓国語の例文は、接辞境界を「-」、接語境界を「=」、日本語で分ちたれない箇所を「」で表し、グロスは省略する。

また、**-te**も遠野方言の「ケ」と同様、独り言的な文での用法と伝達文での用法を持つ¹⁶。

(33) Hyeng=un nwukwu=eykey phyenci=lul sse-ss-*te*-la. — 独り言的な文…「思出し」
お兄ちゃんは 誰に 手紙を 書イタツケ (ナー)。

(34) Hyeng=i chinkwu=eykey phyenci=lul sse-ss-*te*-la. — 伝達文…「過去の認識」
お兄ちゃんが 友達に 手紙を 書イタツケ (ヨ)。

このようなことから、ムード的用法でも、韓国語の-essess-、**-te**は遠野方言の「～タッタ」「ケ」と類似しているのではないかと考えられるが、予想に反して、両者の間にはかなりの違いがある。

(35) a. I kakey=nun pingkwalyu=ka manh-*ass*-kwuna/manh-*assess*-kwuna/*manh-*te*-la!
この 店は アイスが 多カッタ/*イッペアッタッタ¹⁷/*多カツケ! (30 種類以上も売ってるなんて知らなかった。)〈発見〉

b. Kuleko_po-ni, i kakey=nun pingkwalyu=ka manh-*assess*-kwuna/*manh-*te*-la.
そう言えば、この 店は アイスが イッペアッタッタ/多カツケ。〈想起〉

c. [友達の言うことを信じていなかったが、実際にそうだと分かって=文脈 A]

Cinccalo i kakey=nun pingkwalyu=ka manh-*assess*-kwuna/*manh-*te*-la.

本当に この 店は アイスが ?イッペアッタッタ/?多カツケ。〈認識更新 A〉

d. [何となく思っていたことを確認したところ、実際にそうだと分かって=文脈 B]

Yeksi i kakey=nun pingkwalyu=ka ?manh-*assess*-kwuna/*manh-*te*-la.

やっぱり この 店は アイスが イッペアッタッタ/?多カツケ。〈認識更新 B〉

※manh-*ass*-kwuna/「多カッタ」は全ての例で使用できるので、a の〈発見〉の場合のみ提示。

①「～タッタ」は相対的に過去の認識時の比重が大きい〈想起〉〈認識更新 B〉の場合に用いられるが、-essess-は現在の認識時の比重が大きい〈認識更新 A〉や〈発見〉(後述の条件付き)の場合にも用いられる。反面、〈認識更新 B〉の場合には不自然になる。

②「～ケ」が三つのムード的用法のうち、〈想起〉の場合に限って用いられるのに対し、**-te**は〈想起〉の場合であっても用いられることはなく、いずれの用法も持たない。

類例を挙げる(先の例と同様、sengsilhay-ss-kwuna/「マジメダッタ」は〈発見〉のみ提示)。

(36) a. I salam sengsilhay-*ss*-kwuna/sengsilhay-*ssess*-kwuna/*sengsilha-*te*-la!

この 人 マジメダッタ/*マジメニ話セタッタ/*マジメダツケ! (知らなかった。)〈発見〉

b. Cen=ey malhay-ss-nuntey, ku salam sengsilhay-*ssess*-kwuna/*sengsilha-*te*-la.

前に 話したけど、あの 人 マジメニ話セタッタ/マジメダツケ。〈想起〉

c. [文脈 A] I salam sil=un sengsilhay-*ssess*-kwuna/*sengsilha-*te*-la.

この 人、実は ?マジメニ話セタッタ/?マジメダツケ。〈認識更新 A〉

d. [文脈 B] Sayngkak=taylo, i salam ?sengsilhay-*ssess*-kwuna/*sengsilha-*te*-la.

思った通り、この 人 マジメニ話セタッタ/?マジメダツケ。〈認識更新 B〉

以下、韓国語と遠野方言の形式に見られる上記①,②の違いについて、それぞれ考察を行う。

4.2. -essess-と「～タッタ」の違い

韓国語の-essess-は遠野方言の「～タッタ」と異なり、現在の認識時の比重が大きい〈認識更新 A〉の場合にも用いられる[前掲(35c),(36c)]。さらに〈発見〉の場合にも用いられるが[前掲(35a),(36a)]、これには条件がある。インフォーマントによれば、前掲(35a)でmanh-*ass*-kwunaとmanh-*assess*-kwunaは、「この店は、そんなにアイスの種類が多いとは思わなかったのに～」という場合なら使用できるとのことであった。この場合、話し手は種類がどの程度あるのかに関する何らかの想定を有していたことになり、前掲(35c)の〈認識更新 A〉の場合に近いと言える。

¹⁶ 五官を通じた知覚を表すことによる主体の人称制限(基本的に一人称不可)や、歴史的事実に用いられない点も同様。

(i) Ku ttay=ey *na/ku=nun kunye=wa iyakiha-*te*-la. その時、*俺/あいつは彼女と話シタツケ(ヨ)。

(ii) *Yupi=nun kongmyeng=ul sey_pen chacaka-ss-*te*-la. *劉備は孔明を三回訪ネタツケ(ヨ)。

¹⁷ 形容詞述語の「多カッタッタ」は遠野方言では用いられないので、類似の意味を表す動詞述語で代える。(36)も同様。

ただし、そこでは、話し手が種類が多いという話を疑い、誤った仮の認識を持っていたのに対し、この場合の想定は、あくまで無意識になされているという点が異なる。なお、発話時以前には、そのような無意識の想定さえなかった場合は、過去表現を含まない *manh-kwuna* が用いられる。

このように〈発見〉の用法では、*-essess-*が条件付きで使用されるが、そもそも単純な過去形 *-ess-*の使用にも同様の条件があることに注意すべきである。許(2008)は、日本語の「～タ」が話者の「想定していなかった」状態の発見 [(37)]、「想定していた」状態の発見 [(38)]、いずれの場合にも用いられるのに対して、韓国語の *-ess-*は、後者の場合には用いられにくいとしている。

(37) [小学生の時に書いた日記がどこかに行ってしまった。たぶん部屋の中にあるだろうと思いつながら、あまり気にしていない。数日後、引越しのため、荷物を整理していたところ、タンスの中に教科書と一緒に入っている日記を偶然見つけて]

E, ile-n kos=ey ilki=ka iss-ess-ney. あ、こんなところに日記が あった。

(38) [夏休みに家族連れで海外旅行に行く。現地の空港に A さんが出迎えに来ることになっている。到着ロビーに着いて A さんを探す。しばらく経って、向こうで手を振っている A さんを見つけて]

*E, iss-ess-ta, iss-esse. あ、いた、いた。

この「想定していた」状態の発見の場合（前後で状態の切り替えなし）は用いられにくいという特徴は、*-ess-*だけでなく *-essess-*にも当てはまる韓国語の過去形に共通するものだと考えられる。

*-essess-*が現在の認識時の比重が大きい〈発見〉（認識更新 A）も表すのは、「～タッタ」より原形に近い用法を保持しているためだと見られる。*-essess-* / 「～タッタ」は、*-e iss-ess-* / 「～テアッタ」（韓国語には現存。遠野方言にはないが、津軽方言にある）という“中止形+存在動詞過去形”の構造を持つ形式が縮約したもので、元々〈過去〉の〈継続性〉を表したと考えられる（cf. 高田 2008、Song 2001）。「～タッタ」はこの用法を失っているが、*-essess-*は依然有する。

(39) Cengwen=uy photo=ka yellye-ssess-e/yellye_iss-esse.

庭の ブドウが *実をツケタッタ / 実をツケテアッタ（津軽方言）。

※遠野方言は「ツケテラッタ」。…「ツケテイダッタ」に相当。「～テダッタ」に縮約後、[d]→[r]。

これは過去のある時点の状態を述べる文であるが、状態が発話時に成立している場合、〈発見〉を表す文になる。このことや、標準語でも「～実をつけていた！」のように「～ていた」が〈発見〉を表すことから、〈発見〉は〈過去〉の〈継続性〉を表す形式の派生的意味だと言える。*-essess-*は〈過去〉の〈継続性〉を表す用法を残していることで、〈発見〉を表せるのだと考えられる。

一方、〈認識更新 B〉の用法では、*-essess-*は「～タッタ」と異なり、不自然になる[前掲(35d),(36d)]。これも〈発見〉の用法と同様、「想定していた」状態の場合には用いられにくいという韓国語の過去形の特徴に起因すると見られる。〈認識更新 B〉は、仮の認識が正しかったことを発話時に認識する用法であるため、*-essess-*が不自然になるのだろう。*-ess-*はこの用法でも使用できるが、許(2008)は、一見「想定していた」状態の発見のような場合にも *-ess-*が用いられると述べている。

(40) [太郎に電話しても出ない。もしかして駅前の居酒屋にいるのではないかと思い、行ってみると、太郎が一人でお酒を飲んでいる] Yeksi, iss-ess-ney. やっぱ、いた。

ここでは、「もしかして駅前の居酒屋にいるのではないか」「いや、いないかもしれない」のような思いまどいにより、「想定していた」状態と発見した状態の食い違いの可能性が生じ、*-ess-*の許容度が上がるという。対して、*-essess-*は「現在の断絶性」を持つため、より強い食い違いが必要で、思いまどいがあっても、「想定していた」状態の場合には用いにくいのだと考えられる。

4.3. *-te-*と「～ケ」の違い

遠野方言の「～ケ」が三つのムード的用法のうち、〈想起〉のみは持つのに対し、韓国語の *-te-*は、これを含めていずれの用法も持たない。〈想起〉は、一度は認識したが不確かになった事態を、発話時に再認識する用法である。*-te-*が〈想起〉の用法を持たないのは、認識時が具体的になければならないという使用上の条件があり、認識した事態が不確かになりにくいためだろう。

-te-は遠野方言の「～ケ」と異なり、(I) ET < ST の状況でも「過去の認識」を表す用法で利用できるが、次のような点から、その際、認識時が具体的であることが必要だと言える。

(a) -te-が(I)の状況で「過去の認識」を表す用法で用いられるのは、一時的状態の場合である。

(41) Cepen ilyoil=un tewe-ss-ta/tep-te-la. この間の 日曜は 暑カッタ/*暑カッケ。

(42) Ku ai=nun elye-ss-ul ttay=nun kwiye-we-ss-ta/*kwiye-p-te-la.

あの 子は 小さい 頃は カワイカッタ/*カワイカッケ。

(b) 一時的状態であっても、遠い過去に認識した事態の場合は、-te-を使用しにくい。

(43) *10nyen cen ku nal=un tep-te-la. *10年前の あの 日は 暑カッケ。

(c) ただし、遠い過去のことでも、認識時の状況を明確に記憶している場合、-te-が使用可能。

(44) [大人になってから、高校時代に野球の大会で優勝した時のことを思い出して]

Ku ttay=nun cengmal kippu-te-la. *あの 時は 本当に ウレンカッケ。

〈想起〉の場合は ET > ST であるが、(I) ET < ST の状況と同様、認識時が具体的でなければならないことで、-te-は不確かになった事態を再認識するこの用法を持たないのだと考えられる。

このように認識時が具体的なのは、-te-が本来の用法に近い特徴を保持していることによると見られる。崔(1995)によれば、中期韓国語では、-te-は過去時制において-Ø-とアスペクト的に対立する未完了相(imperfect)であったという。これは出来事の内部に視点を置き、過程の一段階を捉えるものである。崔は-te-の機能を「認識時への視点の移動」とするが、これは未完了相の機能に由来すると見られる。認識時が具体的だということは、特定の一時点に視点を移動することであり、出来事の一段階を捉える未完了相の特徴を強く受け継いでいることになる。

5. おわりに

以上、本発表で述べたことをまとめると、次のようになる(番号は冒頭に挙げた内容に対応)。

- (i) 遠野方言の「～タッタ」「～ケ」は〈想起〉等、過去の認識時の比重が大きい用法のみ持つ。
…「～タッタ」が「現在との断絶性」を持ち、「～ケ」が「過去の認識」を表すことと関係。
- (ii) 静岡市方言の「～ケ」は、現在の認識時の比重が大きい〈発見〉〈認識更新〉の用法も持つ。
…認識時が現在か過去かに関わらず、「認識の成立」を表す、「～ケリ」に近い用法を保持。
- (iii) 韓国語の-essess-は〈発見〉〈認識更新 A〉の用法も持ち、-te-は〈想起〉の用法も持たない。
…それぞれ〈過去〉の〈継続性〉、認識時の具体性という本来の用法に近い特徴を保持。

今後の課題は次の研究を行い、過去表現のムード的用法同士の関係を追究することである。

- ・諸方言におけるムード的意味の表し分けの様相(特に静岡県方言の世代差・地域差)を調査。
- ・韓国語以外の類似の用法を持つ形式(中国語の「來着」やトルコ語の-di, miş等)と対照。

参考文献

- 金水 敏(2001)「テンスと情報」音声文法研究会(編)『文法と音声Ⅲ』, 55-79, くろしお出版。
小林 隆(1999)「種子島方言の終助詞『ケル』」黒田成幸・中村捷(編)『ことばの核と周縁—日本語と英語の間—』, 265-286, くろしお出版。
定延利之(2004)「ムードの『た』の過去性」『国際文化学研究』, 1-68, 神戸大学国際文化学部。
高田祥司(2004)「岩手県遠野方言の非動詞的述語及び否定のテンス—(過去)の場合における『一ケ』の使用を中心に—」『日本語文法』4-2, 103-119。
高田祥司(2008)「日本語東北方言と韓国語の〈過去〉の表現について」『日本語の研究』4-4, 32-47。
高田祥司(2021)「東北方言から見る『した』とムード」『日本語のテンス・アスペクト研究を問直す 2—「した」「している」の世界—』, 113-135, ひつじ書房。
許宰碩(2008)「日本語の『タ』のムード的意味用法について—韓国語との対照の観点から—」『日本学報』74-1, 131-142, 韓国日本学会。
山口幸洋(1968)「静岡県方言の過去表現について」『国語学』75, 63-74。
Song, Chang-sen (2001) “-essess-=-uy hyengthay=wa uymi.” *Mwunhak=kwa ene* 23, 103-120。
崔東柱 (1995) “國語 時相體系=uy 通時的 變化=ey kwanha-n 研究.” Sewul 大學校 大學院 博士學位論文。
DeLancey, Scott (1997) “Mirativity: the grammatical marking of unexpected information.” *Linguistic Typology* 1, 33-52.